

教職課程において「教育相談」関連科目授業を行うための 教材研究（Ⅰ）

—教職課程カリキュラムと関連づけて—

Study of teaching materials for teacher training of School Counseling（Ⅰ）

鹿内 信善¹・石田 ゆき²
Nobuyoshi Shikanai・Yuki Ishida

概要

筆者らは、看図アプローチを用いた教材開発・授業開発研究を重ねてきた。看図アプローチとは「みること」を重視した授業づくりの方法である。われわれがこれまでに開発してきた看図アプローチを用いた教材や授業プログラムの中に、大学における教職課程の「教育相談」関連科目授業で活用可能なものが多く含まれている。本稿では看図アプローチという枠組みの中で開発してきた教材等の中から「アイスブレイクツール」「シグナルの気づきツール」「いじめ対応プログラム体験学習ツール」として活用できるものを取り上げ、再構成した。

看図アプローチはアクティブラーニングを引き出す方法としても有効である。教職課程で開講する科目でもアクティブラーニングの視点を取り入れることが求められている。われわれがこれまでに開発してきた看図アプローチによる教材や授業方法はアクティブラーニングを活性化する。このため本稿で紹介する教材や授業方法は、これからの教職課程授業構成にも寄与し得るものである。

キーワード：教育相談、看図アプローチ、アクティブラーニング、教職課程

Ⅰ．問題と目的

教職課程再課程認定のスケジュールに合わせて、文科省は、教職課程コアカリキュラム(案)を作成した。教職課程コアカリキュラムの活用については次のことが指摘されている。「教職課程の担当教員一人一人が担当科目のシラバスを作成する際や授業等を実施する際に、学生が当該事項に関する教職課程コアカリキュラムの『全体目標』『一般目標』『到達目標』の内容を習得できるよう授業を設計・実施し、大学として責任をもって単位認定を行うこと。(文部科学省 2017)」このことを実現するために、コアカリキュラムに対応できる教材の開発が必要である。

また、教職課程の授業を行うにあたっては「アクティブ・ラーニングの視点を取り入れること」も求められている。このためコアカリキュラムに対応した教材も

アクティブラーニングを引き出しやすいものが必要になる。筆者らはこれまでに、看図アプローチ・看図作文などの授業づくりの方法を提案してきた(例えば、鹿内 2014,2015)。

その中で用いられている教材にはアクティブラーニングを引き出しやすいものが数多く含まれている。また、われわれが開発してきた教材には、「教育相談」およびそれに関連する授業で活用可能なものが多い。

そこで本論文では、われわれが「看図アプローチ」「看図作文」用に開発してきた教材を、「教育相談」等の教職科目授業にも活用できるよう再構成していく。

Ⅱ．「教育相談」科目における目標

教育相談に関する科目は正式には「教育相談(カウンセリングに関する基礎的な知識を含む)」の理論及

1 福岡女学院大学(現在天使大学)

2 日本医療大学

び方法」とよばれている。この科目のコアカリキュラムでは全体目標が1個、一般目標が3個、到達目標が9個あげられている。この文書は、本稿が参照する基本文献となるものである。このため以下に全文を引用しておく。

全体目標：教育相談は、幼児、児童及び生徒が自己理解を深めたり好ましい人間関係を築いたりしながら、集団の中で適応的に生活する力を育み、個性の伸長や人格の成長を支援する教育活動である。幼児児童及び生徒の発達の状況に即しつつ、個々の心理的特質や教育的課題を適切に捉え、支援するために必要な基礎的知識（カウンセリングの意義、理論や技法に関する基礎的知識を含む）を身に付ける。

（1）教育相談の意義と理論

一般目標：学校における教育相談の意義と理論を理解する。

到達目標：

- 1) 学校における教育相談の意義と課題を理解している。
- 2) 教育相談に関わる心理学の基礎的な理論・概念を理解している。

（2）教育相談の方法

一般目標：教育相談を進める際に必要な基礎的知識（カウンセリングに関する基礎的事柄を含む）を理解する。

到達目標：

- 1) 幼児、児童及び生徒の不応答や問題行動の意味並びに幼児、児童及び生徒の発するシグナルに気づき把握する方法を理解している。
- 2) 学校教育におけるカウンセリングマインドの必要性を理解している。
- 3) 受容・傾聴・共感的理解等のカウンセリングの基礎的な姿勢や技法を理解している。

（3）教育相談の展開

一般目標：教育相談の具体的な進め方やそのポイント、組織的な取り組みや連携の必要性を理解する。

到達目標：

- 1) 職種や校務分掌に応じて、幼児、児童及び生徒並びに保護者に対する教育相談を行う際の目標の立て方や進め方を例示することができる。
- 2) いじめ、不登校・不登園、虐待、非行等の課題に対する、幼児、児童及び生徒の発達段階や発達課題に応じた教育相談の進め方を理解している。
- 3) 教育相談の計画の作成や必要な校内体制の整備など、組織的な取り組みの必要性を理解している。
- 4) 地域の医療・福祉・心理等の専門機関との連携の意義や必要性を理解している。

(文部科学省 2017,p.22)

以下においては「教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法」を「教育相談」と略していく。

Ⅲ．到達目標とその達成に役立つ教材

「教育相談」科目の「到達目標」達成に役立つ教材とその活用法を整理していく。以下において紹介していく教材とその活用法は、基本的にはわれわれが開発してきたオリジナルなものである。しかし、既に他の研究者や実践家が開発したものとわれわれがオリジナルに開発したものとを組み合わせ活用している場合もある。

Ⅲ－１ 「ビッグイベント」と「スモールシークレット」

Ⅲ－１－１ 「ビッグイベント」

われわれは、自分たちが担当するすべての授業に協同学習を取り入れている。協同学習はアクティブラーニングを引き出す効果的なツールになるためである。

協同学習の導入教材としてよく知られているのは「ビッグイベント」である。これは、グループメンバーのアイスブレイクにもなる。Jacobs 他（邦訳 2005,pp.40-41）では、「ビッグイベント」を次のように説明している。

「各自が1本の直線を描く。線の片方の端に、その

生徒が生まれた年を書く。もう一方の端には現在の年を書く。その線上に、自分の人生での重大な出来事を示す5個か6個のマークをつける。」

われわれは通常、次のワークシートを用いてビッグイベントを行っている。また、マークをつけるビッグイベントが5個や6個では多すぎるのでわれわれは2個にしている。

ワークシート

所属 () 名前 ()

() |-----| ()

また、「ラウンドロビン」と「インタビューの輪」を併用してグループ成員間のコミュニケーションを引き出している。ビッグイベントは、グループメンバーのことを知り合うためのよいツールになる。しかし、ひとつ大きな短所をもっている。この短所は「ビッグイベント」を体験した学習者1のふりかえりからもうかがえる。

学習者1のふりかえり

ビッグイベントのワークをしてみて、自分はビッグイベントといわれてよるこばしいことや良いことばかり思い付いたけど、悲しい経験や失敗したこともビッグイベントに入るんだなと思った。

学習者1が指摘しているように、辛く苦しいビッグイベントをもっている人はたくさんいる。「ビッグイベント」というワークはそれを思い出させてしまう。またそのことが学習者に好ましい影響を与えない場合もあることは容易に想像がつく。この短所を克服するため、われわれは、「スモールシークレット」という方法を開発した。次に「スモールシークレット」について解説していく。

Ⅲ-1-2 「スモールシークレット」

「スモールシークレット」は、従来、われわれが「ひみつの絵」とよんでいたツールである。「ビッグイベント」とセットで使うことが多くなったので呼称も対応するように「スモールシークレット」と改めた。われわれが開発したオリジナルな協同学習ツールである。スモールシークレットについては鹿内（2015,pp.18-23）で詳しく説明してある。それに一部加筆したものを紹介していく。

説明

人と人が仲良くなるためには、相手のことをよく知らなければいけません。また、相手に自分のことを知ってもらわなければなりません。相手に自分のことを知ってもらう行動を「自己開示」といいます。

これから、グループの人たちで自己開示をしてもらいます。相手に自分のことをよく知ってもらうために、皆さんがもっている「ちいさなひみつ」を打ち明けてみるのが効果的です。これから「ちいさなひみつ」を打ち明ける準備をしていきます。まず、そのワークシートに、皆さんの「ちいさなひみつ」を表現する絵を描いてもらいます。

この説明だけでは、作業内容が十分に伝わらないことがある。そこで鹿内はいつも、自分自身の例を黒板に描いて見せる。鹿内がよく使うのは下の絵である。

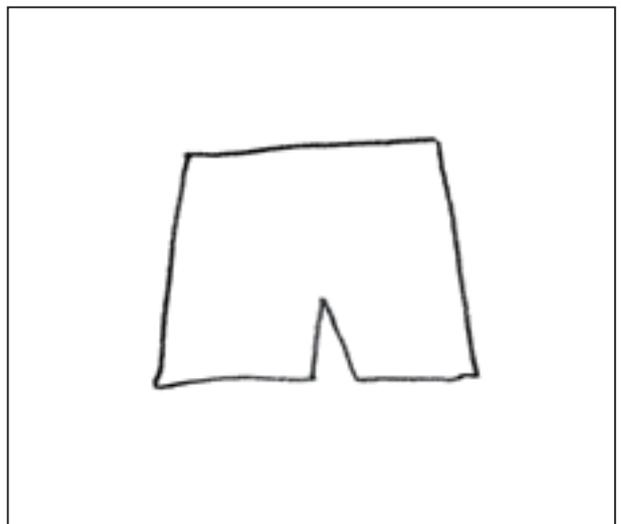


図1 授業者例示「スモールシークレットの絵」

教員を対象にしたある研修会でも、この絵を使用した。鹿内が絵を板書し終えて「これが私の秘密です」と言うと、参加していたひとりの教員が「パンツをはいていない!」と大きな声で言ってくれた。この発言は、研修会開始早々に生まれてきた積極的な参加者反応である。そこで鹿内は、この教員の発言を取り入れながら、次のようにして、自身の「ひみつ」を開示していった。

授業者の自己開示例

ありがとうございます。私の方から「パンツ」ということばを言いにくかったのですが、今、「パンツ」と言って頂きましたので、私も「パンツ」ということばを遣わせて頂きます。パンツははいています。はいていますが、今日のパンツは特別なパンツなのです。

私は、いつもこうしてたくさんの方の前でお話をしていますが、毎回緊張してしまいます。それで、こういうときは少しでもリラックスできるように、勝負パンツをはいてくることにしています。私の勝負パンツは、〇〇イーグルというブランドのパンツです。今日もしっかり、〇〇イーグルパンツをはいてきています。〇〇イーグルパンツをはいている天使大学の鹿内です。

これは、あくまでも例である。授業者は、自分自身の「スモールシークレットの絵」を描いていけばよい。自己開示の例示も、その場の空気を読みながら行う。例えば、女性が多い教室や誤解されそうな文脈では「パンツ」ということばを遣わない、等の配慮は必要である。授業者の自己開示が済んだら、次の指示によって作業をすすめてもらう。

指示

皆さんの「スモールシークレット」を絵にして、ワークシートに描き込んでください。

この指示で絵を描けない人が、ごく稀にいる。そんなときは「1本の線でもいいです。パンでもリンゴでも、

描けるものを何でも描いておけばいいです。」とサポートしてあげる。

ここで紹介しているのは、グループワークとして行う方法である。グループをつくる時は、それぞれのグループ毎に「1番さん」から「n番さん」まで番号を決めておく。「スモールシークレットの絵」を描き終えたらその絵をもとに「1番さん」から自己開示してもらおう。そのために、次のような指示をする。

指示

それでは、さっき私が行ったように、皆さんが描いた「スモールシークレットの絵」の説明をしていってください。1番さんからお願いします。1番さんの説明が終わったら、2番さんは1番さんに何かひとつ質問してあげてください。適切な質問をしてあげたら、それは、「私はあなたの話をちゃんと聞いていましたよ」というメッセージにもなります。1番さんはその質問に答えてあげてください。

1番さんが答え終わったら、次は2番さんが、自分の「スモールシークレットの絵」の説明をします。それが終わったら、3番さんが質問してあげる。こういうふうには、全員で紹介し合っていってください。

これは、少し込み入った指示になっている。上記の指示を次のようにまとめ、板書かプロジェクターで呈示しておくともスムーズにすすむ。

1番さん：「スモールシークレットの絵」の説明
 2番さん：1番さんに質問してあげる
 1番さん：質問に答える
 2番さん：「スモールシークレットの絵」の説明
 3番さん：2番さんに質問してあげる
 (以下同様)

鹿内は看図アプローチという授業づくりの方法を提案している(例えば鹿内2015)。看図アプローチとは「みること」を重視した授業づくりの方法である。ここで紹介した「スモールシークレット」は看図アプローチ

という枠組みの中で開発した教材である。

Ⅲ-1-3 「ビッグイベント」と「スモールシークレット」の教材価値

「ビッグイベント」と「スモールシークレット」は、「教育相談」関連科目の教材としてどのような役割を果たすことができるのであろうか。われわれは「教育相談」等の科目の最初の授業で「ビッグイベント」と「スモールシークレット」を実施することが多い。実施は必ず協同学習スタイルで行う。また、「ビッグイベント」と「スモールシークレット」をセットにして行う。そのような授業を受けた学生たちの「ふりかえり」を資料にして、「ビッグイベント」と「スモールシークレット」の教材価値を明らかにしていく。まず、学習者2と学習者3の「ふりかえり」を載せておく。

学習者2のふりかえり

知らない子とこんなに話せるなんて今までの自分じゃ有り得ないことだったのでとても驚きました。ちょっとした秘密を言うのは少し恥ずかしかったけれど楽しかったです。

学習者3のふりかえり

初めてカウンセリングに関する授業を受けて、なぜ他人だとうまく話せないのかを聞いて自分も人見知りなほうなのでこういう理由なのかなと考えることができた。ビッグイベントとスモールシークレットを初対面の子とも楽しく話せてびっくりした。

学習者2も学習者3も、自分が初対面の相手とよく話せたことへの「驚き」を報告している。「ビッグイベント」と「スモールシークレット」を行うと、初対面の学生同士でグルーピングしても、話し合いは活発になる。学習者2・学習者3の報告は、「ビッグイベント」と「スモールシークレット」はアイスブレイクのための効果的なツールになることを示している。これは、クラス単位で「予防的なカウンセリング」を行う時などに活用できる。文科省のコアカリキュラムでは、一般目標のひとつとして、「教育相談の具体的な進め方

…を理解する」があげられている。「ビッグイベント」と「スモールシークレット」は、この目標達成に役立つ。ただし、前述したように、「ビッグイベント」では、辛い出来事や苦しい出来事を思い出させてしまう可能性もある。学生たちが将来実践する場合は、このことに留意するよう、伝えておく必要もある。われわれは学習者1のような「ふりかえり」もシェアさせながら、この留意事項を学生たちに伝えている。

「ビッグイベント」と「スモールシークレット」を体験した学習者のふりかえりをあと2つ紹介する。

学習者4のふりかえり

深く考えすぎずに、自分が思ったこと、気になったことを質問するのが大切だと思った。間髪入れずに質問すると相手もうれしいし、自分も沈黙にならずに楽です。共感することも大切です。（「わかるー。」「大変だね。」）この言葉をもらうとうれしくなります。

学習者5のふりかえり

3人とも話したことがない人たちだったので、最初はとても不安でしたが、このように話すきっかけがあるだけでみんなと会話できて笑顔になれることがわかりました。相手がウンウンとうなずいて聞いてくれると、自分ももっと話したくなったので、会話には話し手と聞き手、どちらも大切だと感じました。

コアカリキュラムの到達目標として次の項目があげられている。「受容・傾聴・共感的理解等のカウンセリングの基礎的な姿勢や技法を理解している。」学習者4・5は、「ビッグイベント」と「スモールシークレット」の体験から受容・傾聴・共感の重要さと、それらを実践する方法を体験しているのである。「ビッグイベント」と「スモールシークレット」は「教育相談」関連科目の「到達目標」を達成させていくためのよいツールになる。

Ⅳ. 看图アプローチを「シグナルへの気づき」ツールにする

コアカリキュラムの到達目標の中に次の文章が入っている。「幼児・児童及び生徒の発するシグナルに気づき把握する方法を理解している。」われわれは、「新しい看图作文」という作文指導法を開発している。看图作文とは、学習者に絵図を読み解かせ、読み解いた内容を作文にまとめさせていく作文の指導方法である。看图作文は、もともとは中国の国語教育で盛んに行われていた。児童生徒は、作文の時間に「何を書いていいかわからない」「どう書いていいかわからない」とよく言う。作文指導を行う教師は、子どもたちが訴えるこの問題を解決してあげなければならない。看图作文は作文指導におけるこの2つの難問を解決してくれる可能性をもった指導方法である。しかし、中国では、2001年の教育改革以降看图作文の授業が次第に形骸化するようになってきた（鹿内他2014参照）。そこで鹿内ら（例えば鹿内2010）は中国の看图作文を参考にしながら、作文指導をアクティブラーニング化できる「新しい看图作文」を開発してきた。「新しい看图作文」開発には、絵図開発と授業法開発の2つが含まれる。われわれが開発してきた絵図の中に、「児童生徒の発するシグナル」をキャッチするのに役立つものが含まれている。そのような絵図のひとつをここで紹介しておく。図2はわれわれが「はしご」と名づけている看图作文用絵図である。これは、本論文の第2筆者石田が制作したオリジナル作品である。この絵図を用いた看图作文の授業展開は鹿内（2014）で詳述している。授業展開の説明は割愛する。「はしご」絵



図2 はしご

図を用いて看图作文を書いてもらうと、独創性豊かな作文がたくさん生まれてくる。一例として学習者6の作文を載せておく。学習者6は大学生である。

学習者6の作文例

「はしごの橋本君」

昼休みのチャイムが鳴り響く、ある夏の日。僕は友達とかくれんぼを始めた。

「じゃんけんぽん！いえーい、ノブが鬼な！三十秒数えろよー！」

僕は鬼になった。三十秒数えてすぐ友達を探し始めた。校庭は広く、森のような場所やプールもあった。

しばらく歩いていると木の影にみゆちゃんが隠れているのに気づいた。けど僕はみゆちゃんと二人で他の人を探すのが嫌だから気づいていないふりをして、その場をあとにした。

今年のプール開きは行われていなかったが、プールの入り口が開いているのを見つけた。僕は中に入って、更衣室やシャワールームを探した。すると、プールの方からくしゃみが聞こえた。僕は急いでプールに行き、はしごに人がいるのを見つけて、「見つけた！」と言った。しかし、「僕はかくれんぼには参加してないよ。」と返ってきた。本当だ、よく見たら隣のクラスの橋本くんじゃないか。僕は少し悔しくなり、プールに背を向けた。しかし僕は妙なことに気づいた。

「ねえ橋本くん。」

「何？」

「何やってんの？」

「見れば分かるだろ？はしごにつかまってるんだよ。」

「いや、何やってんの？」

「分かんない奴だなあ。」

ついに僕は言葉が出なくなり、教室へ戻った。

僕は隠れていたみんなにすべてを話した。

僕はみんなから話を聞いて、すぐにプールへ向かった。はしごにはまだ橋本くんがいた。

そう。橋本くんははしごオタクだったのだ。

「変なこと聞いてごめん。がんばれよ。」

それから二人は昼休みによくはしごにつかま
た。

われわれが開発している看图作文では、このような「明るさ」や「ほのぼの感」が伝わる作文が産出されることが多い。しかし、「はしご」絵図を使った看图作文授業をS市A中学校で行った時は、これまでとは違った結果が見られた。1クラスの半分以上の生徒が、「残酷な結果」や「悲惨な結果」をもった作文を書いていた。A中学校では複数のクラスで「はしご」を使った看图作文授業を行っている。他のクラスの作文も分析してみたところ、すべてのクラスで、半数以上の生徒が残酷・悲惨な作文を書いていることが明らかになった。

「はしご」絵図を用いた全く同じ授業をW県B中学校で実施した時には、「残酷な結果」や「悲惨な結果」になる作文はひとつも産出されなかった（鹿内2014）。

A中学校の多くの生徒たちは、攻撃性に転化されやすい鬱積した心理状態を看图作文を通して発信していたものと考えられる。

教育相談や生徒指導が必要なシグナルは、心理検査を用いたアセスメントによって把握することもできる。しかし心理検査は、それを実施するための特別な時間を必要とする。また、心理検査は、心理学の知識をもっていない教員にとっては使いやすいものではない。さらに、心理検査で出てきた数値がひとり歩きしてしまうこともある。

これに対して、看图作文は日常の授業の中に容易に組み込むことができる。われわれが開発してきた「新しい看图作文」が国語科の学習指導要領に準拠した授業システムになっているためである。また作文の中に出てくる児童生徒のシグナルは、日常的に児童生徒に接している「教師感覚」で読み取れるものである。看图作文は、コアカリキュラムが求めている「児童及び生徒の発するシグナルに気づき把握する方法」のひとつとして活用できるものである。

V. 看图アプローチによるいじめ対応プログラム

鹿内他（2011）は、看图作文の手法にシナリオプランニングの考え方およびプロセスレコードという技法を組み合わせ、いじめ対応を体験学習させる授業モデルを提案している。

実験授業はH大学の「教育心理学演習Ⅰ」の授業の中で行った。図3の絵図を教材とした。今回は「いじめ」をテーマにした。この絵図は、実際に小学校の教室で起こったことをもとにして描いている。学習者には、この絵図をもとにしてシナリオ（看图作文）を書いてもらう。この絵図は、起こっている事柄がどんなことなのか、多様に判断できるように工夫して描いている。この工夫によって、多様なシナリオを書かせることができる。さらにこの工夫によって、教室での出来事をそのまま学生に呈示してしまうことを防ぐことができる。ここではプライバシーに配慮した「いじめ」問題の教材化をはかっている。なお、図3も本論文の第2筆者石田が描いたオリジナル作品である。

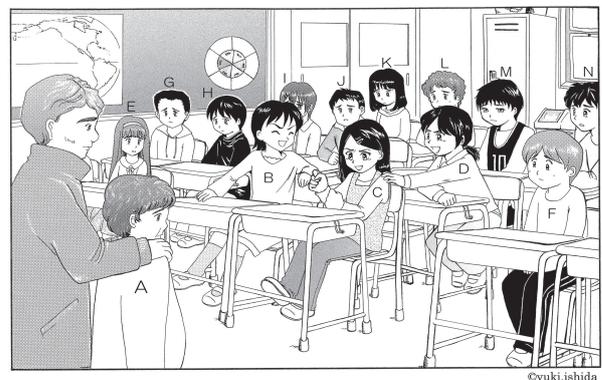


図3 教材絵図

図3絵図を用いて作成したシナリオやロールプレイを取り入れて、「いじめ対応」の授業を構成していくことができる。この方式でつくる授業では多様な「いじめ対応」を体験的に学べるようになっている。その内容は鹿内他（2011）で詳述されている。この授業に対する学習者たちの評価は高かった。そのエビデンスとして学習者7の「ふりかえり」を紹介しておく。ふりかえり全文は鹿内他（2011）に載せてあるので、ここではその3分の1ほどを載せておく。

学習者7のふりかえり

私は、ロールプレイに対して苦手意識をもって
いた。同時に、やれるようにならなければならない
という焦りも同時に持っていた。(中略)

要は、シナリオさえ出来ていれば演技はできる
のだ。想定プロセスレコードは、リフレクション
するためのプロセスレコードを用い、シナリオを
考えるためのツールである。通常はロールプレイ
においてアドリブで行う演技を、じっくり考えて
検証することができるのだ。実際に考えてみると、
なかなかうまく作れない。すっきりしないのだ。
これをアドリブでやろうとすると確実に演技は止
まるだろう。しかし、難しいのではあるがじっく
り考えることによって状況や設定をよく考えて行
動を選ぶことができる。必要ならば、人と相談す
ることができる。想定プロセスレコードは紙媒
体で視覚的なものだから、演技をして見せるより
も効率よく相手に伝わり、いくらでもメモ書きを
加えることができる。今まで苦手意識をもって
いたロールプレイが、想定プロセスレコードとい
うツールを介して、思考の段階が明確になり、考
え方がわかった。これが一番大きな学びである。こ
れから試験や現場でも、事前に考えるときやリフ
レクションの際に、このツールを活用して自分も
みんなも納得のいく対応ができるようにしてい
きたい。

「教育相談」関連科目に活用することを目的とした看
図アプローチ基盤型の教材や授業方法をさらに開発し
ていくことも今後の課題としていく。

文 献

- Jacobs,J. 他 関田一彦(監訳)2005 『先生のためのアイディ
アブックー協同学習の基本原則とテクニックー』 日本
協同教育学会
- 文部科学省 2017 「教職課程コアカリキュラム(案)」
[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/
chousa/shotou/126/shiryo/_icsFiles/afieldfi
le/2017/07/25/1388304_3_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1388304_3_2.pdf)
- 鹿内信善 2010 『看図作文指導要領ー「みる」ことを「書
く」ことにつなげるレッスンー』 溪水社
- 鹿内信善 2014 『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ 協同
学習の新しいかたちー看図作文レパートリーー』 ナカ
ニシヤ出版
- 鹿内信善 2015 『改訂増補協同学習ツールのつくり方いか
し方ー看図アプローチで育てる学びの力ー』 ナカニシ
ヤ出版
- 鹿内信善・渡辺聡・石田ゆき・伊藤公紀 2011 「看図作文
の授業開発(XⅢ)ー「教職実践演習」への活用可能性ー」
『北海道教育大学紀要(教育科学編)』 61巻 第2号
pp.165-179
- 鹿内信善・李 軍 2014 「看図作文の教育史と今後の展望」
『北海道教育大学紀要(教育科学編)』 65巻 第1号
pp.17-31

VI. 考察と今後の課題

本稿で紹介した教材や授業プログラムは、いずれも
看図アプローチという枠組みの中で開発してきたもの
である。それを「教育相談」という文脈の中で活用で
きるように再構成した。今回、文部科学省が呈示した
コアカリキュラムでは「教育相談」等に関する授業に
おいてもアクティブラーニングを取り入れて実施する
ことが求められている。われわれの研究では、看図ア
プローチの中でつくり出された教材はアクティブラー
ニングを引き出すことが繰り返し確認されている。本
論文で紹介した教材を「教育相談」関連科目の授業に
実際に取り入れていくことが今後の課題である。また、